

問1 「(藤原三代の栄華は) ひと眠りの夢のうちのことであつて」。

問2 藤原清衡・基衡・秀衡の三代、約百年にわたって続いた栄華も、今ではひと眠りの夢のように、あつてなく消えてしまった、というはかなさ(無常)を表している。

問3 「それにしても、(義経が) すぐれた家臣を選びすぐつてこの城にたてこもり、(けれども) 手柄も一時のことで、(今は) 草むらとなっている」。

問4 「(涙が流れる) 時が移っていくほど長い間、涙を落としました」。「時のうつるまで」は「時間がたつのも忘れるほど(ずっと)」の意。

問5 「(昔の) 大門の跡は、(ここから) 一里ほどこちら側(手前)にある」。「こなた」は「こちら側・手前」の意。

問6 詩人…杜甫(とほ)。 作品名…春望(しゅんぼう)。

問7 もとの二句…「国破れて山河在り、城春にして草木深し」(国破山河在 城春草木深)。

問8 戦乱で都が荒れ果てても自然だけは変わらず残る、という杜甫の嘆きを引くことで、栄華をきわめた平泉も今は荒れ、自然(山河・草)だけが昔のまま残っているという無常の感慨を重ね合わせるため。

問9 目の前に青々と生い茂る夏草の情景に合わせるため。漢詩の「草木深し」よりも、夏草が青く茂る今の平泉のようすが、より具体的に思いうかぶように言いかえている。

問10 季語…「夏草」 季節…夏。

問11 切れ字…「や」。

問12 義経主従や藤原氏の武士たちが思いえがいた、栄華や手柄(功名)への野望・はかない望みをたとえている。

問13 かつて武士たちが功名を夢見て戦ったこの場所も、今はただ夏草が青々と生い茂るばかり。栄えた者の夢があとかたもなく消え去ったはかなさ・無常を、生い茂る夏草と対比して、しみじみとよんでいる。

問14 初句切れ。切れ字「や」のある初句「夏草や」のあとで、いったん大きく句が切れている。

問15 もとの動詞…「すぐる(選る)」(終止形)。 活用の種類…ラ行四段活用。「すぐり」が促音便になって「すぐつて」となっている。

問16 丁寧の補助動詞(丁寧語)。「(涙を) 落としました」と、読者に対してていねいに述べている。

問17 完了の助動詞「ぬ」(終止形「ぬ」)。「(涙を) 落とした・落としてしまった」という意味を表す。

問18 藤原氏(奥州藤原氏)。清衡・基衡・秀衡の三代を指す。

問19 読み…「こうみょう」。 意味…手柄を立てて名をあげること。また、その手柄。

問20 かつて源義経主従が忠義を尽くして戦い、藤原氏が栄華をきわめたこの地も、今はただ夏草が生い茂る古戦場の跡となってしまった。その栄枯盛衰・人の世のはかなさに、深く心を打たれたから。

問21 作者…曾良（そら）。重ね合わせ…白く咲く「卯の花」を、義経の忠臣・増尾兼房の白髪（白毛）に見立てている。白い花と白髪という色の共通点によって、老武者兼房が奮戦する姿を、今もまぼろしのように思い起こしている。

問22 無常観（むじょうかん）。（「無常」でも可。）この世のすべては移り変わり、栄えたものも必ず滅びる、というはかなさを見つめる見方。

問23 松尾芭蕉（まつおばしょう）。

問24 俳諧紀行文（はいかいきこうぶん）。（「紀行文」でも可。）

問25 江戸時代（元禄期）。